

ブルータスは 死なず

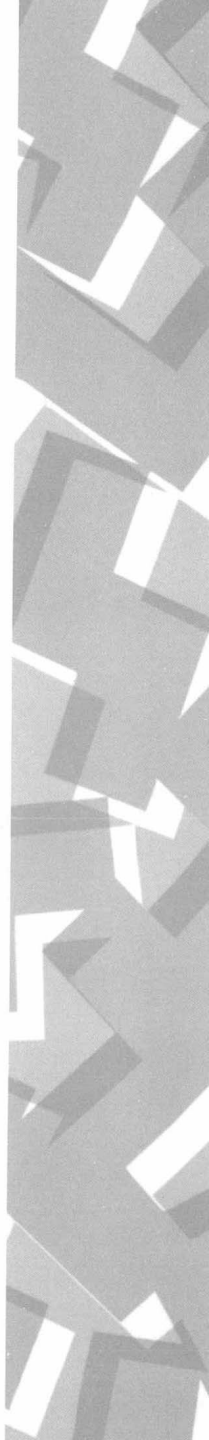
三浦浩



ブレータスは死なず

三浦浩

新潮社



●新潮ミステリー倶楽部特別書

みうらひろし ●印刷・1988年

行者・佐藤亮一 ●発行所・株式会社

町71／振替東京4-808／電話・業

3(266)5411 ●印刷所・二光印刷

●定価1200円 ●乱丁・落丁本は、ご面

い。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-602706-2 C0393

下ろし ●ブルータスは死^しなず ●著者・三浦浩・

12月10日 ●発行・1988年12月15日 ●発

新潮社・郵便番号162東京都新宿区矢来

務部03(266)5111・編集部0

株式会社 ●製本所・加藤製本株式会社

倒ですが小社通信係宛お送り下さ

© Hiroshi Miura 1988, Printed in Japan

*
目
次
*

終章	274
第六章 ブルータス	231
第五章 取引き	204
第四章 ジャーナリスト	176
第三章 ヒロシマ情報	135
第二章 二枚のチケット	103
第一章 上院議員	28
序章	5

装 装
画 幀
栗 平
原 野
裕 甲
孝 賀

ブルータスは死なず

序 章

銀座六丁目にあるクラブで、傲然とホステスの肩に手を廻し、サンフランシスコ・ベイ・ブルースを原語で歌っていたとき、河北誠のポケットベルが鳴った。早い時間で客もまばらだった。

河北はマイクをホステスに渡してステージから降りると、カウンターの上に電話機を出させた。その受話器を上げ、自宅の、仕事用の番号を押した。

留守番電話が、吹き込まれた声を無機的に伝えはじめた。電話は、ワシントンDCにいる旧友の榊原圭介からだった。

「こちらは、榊原圭介です。現在、ワシントンDCの自宅にいます。電話番号は202 328の205×、いまから二時間以内にここに掛けて下さい。なお、202はワシントンDCのエリアナンバーです。念のため」

河北はメモ用紙に手早く榊原のいった電話番号を書き付けた。時計を見る。七時を回っていた。ワシントンとの時差は十四時間だが、たしか夏時間になっている。とすれば向こうは午前六時過ぎである。支局に出る前に電話が欲しいんだな、と、河北は納得した。

チェックにサインして、河北はそのまま店を出た。街はまだほの明るく、ゴールデンウィークの谷間のような日なので、人影も少ない。

酔っていないくてよかった。河北は、国際電話をかけられる電話ボックスを探した。

街の空はほの明るいのにバービルはむしろ暗かった。大半の店が連休に応じて休んでいるためだった。稼いでいるのは、河北のような男と、河北が先ほどまでいたような、ややうらぶれたクラブや酒場だけだった。

河北がP新聞のワシントン支局にいる榊原に手紙を出してから、一週間が経っている。

榊原圭介とは長崎の高校で同じクラスだった。同級生というばかりではなく、同じ新聞部に入っていて、校内新聞を編集していた仲である。

新聞部に入るように誘ったのは榊原の方だったが、三年になったとき、編集長には当然のように河北が選ばれていた。

大学は別の所へ進んだ。河北が入った方の偏差値がやや高かった。ここでも河北は大学新聞の編集に没頭した。

四年後。榊原はすんなりと一流紙のP新聞の記者になっていた。河北はなぜかどこにも受からなかった。三次の面接ぐらいまでは通過するのだが、いつもそこまでのだ。留年したり大学院へ行く余裕はなかった。結局、卒業式の間際に三流の出版社にもぐり込むようにしていられてもらい、自他ともに認める三流誌の編集者になっている。

商法が改正されるまでは、総会屋と持ちつ持たれつして商売をした月刊誌である。それなりに金回りのいいときもあったが、総会屋と表向きは縁が切れてから、出版社も雑誌自体もかなり苦しい経営状態に陥っている。

この夏のボーナスも、まだ出ていない。しかし河北個人は、結構、この水に馴染んで、正体の定

かでない金をかき集めて、傍目^{はため}には優雅な暮しをつづけている。

おれは天性のブラックジャーナリストかもしれないと、夜の姿に変わりつつある銀座の空気を吸いながら河北は思っていた。その河北の経験の中でも、今度、手がけたものは、おそらく最大のものだった。

四丁目に出る所で河北は立ち止まった。内ポケットを探ってテレホンカードを出した。五百円のカードですでに二十回は使っているから、残りは三百円足らずだ。七時を過ぎていたので、少しは割安になっているが、三百円では一分も話せないだろう。

テレホンカードを買おうとしたが、こんなときにはかえて目につかないものだ。しばらく迷ったが、晴海通りにドラッグストアを認め、入っていった。ラークを二つ買って一万円札を出し、五千円札と残りは百円玉で釣りをもらった。

数寄屋橋のスクランブル交差点を斜めに渡った。交番の左横にある電話ボックスは国際電話が出るはずだ。

受話器を取り、カードは使わず、はじめから百円玉を入れ、0011と押し、あとはメモを見ながら202 328 205Xと長い番号を押していった。

しばらく電子音めいた振動がつづいた。

「ハロー」

旧友の声だった。

「おれだ、河北だ。あんたから電話をもらった……」

「早かったな。いま家か」

「いや、数寄屋橋だ」

「スキヤバシ？ クラブからか」

「ちがう、ほんとうの数寄屋橋。交番の隣の公衆電話のボックスだ」

「公衆電話か。大丈夫か」

金のことらしかった。

「大丈夫だ。百円玉が四十五枚、いや、もっとある」

釣りにもらったのが四十五枚だから、少なくとも六十枚近くは持っている。

「銀座か。もちろん夜だな」

「ああ、夜だ。しょぼくれた夜だ。ところで、用件はなんだ」

「君からの、手紙の件だ」

「どうした。牧田には会ったのか」

「会った」

「どのくらい」

「三時間ほどだ」

河北は受話器に向かって口笛を吹いた。

「たいしたもんだな、P新聞さんは」

皮肉ないい方になっている。いつもそうだったが、やはり地が出ていた。

「P新聞はどうでもいいが、マキタ氏が、君に会いたい、ということになった」

「牧田が、おれに、会いたい、と」

「そういうことにした」

「あんたの手腕か」

「そう思いたければ、思ってくれていい。それで、なるべく早く、こちらに来ないか。君もわかつてのとおり、上院議員を、今、そちらに行かすわけにはゆかない」

それぐらいは、分つて当然という口調である。

「航空運賃その他はマキタ氏が負担することになっている。それは、どんな場合でもだ」

「つまり、おれは、フリーハンド、ということだな」

河北は念を押した。彼にしてみても意外な展開に、すこし戸惑っている。それに、次々に消えてゆく百円玉を、右手で補給しつづけているのも、気持ちを一っそう落ち着きのないものになっていた。

「そうだ。いつ、来れる。わかつているだろうが、シークレットにだ」

「休暇を取る。来週、初めから」

「月曜に来れる、というわけか」

「同じ日付に着けるんだな、ワシントンには」

「大体、そうだ。いま夏時間だがね」

榊原はおよそ無意味なことをいった。もつともそうしたことが、この男を一流紙の記者にしているのかもしれない。

「全日空の直行便で行く。月曜に」

電話機はちょうど二十枚の百円玉を消化していた。

「諒解。マキタ氏に、火曜あたりを空けておくようにいつてみる」

「榊原」

「なんだ」

「これは、おれたちにとって、プラスのことなんだろうな」

「もちろん、そうだ。君にとつても、おれにとつてもだ。くり返すが、他人に知られぬように、来てくれ。それと、領収書は忘れるな」

「なんだって？」

「航空券の領収書」

「わかった。週末か日曜にもう一度、電話する」

「そうしてくれ。ただし、自宅のこのナンバーだ」

「そうしよう。じゃあ」

「じゃあ」

河北誠は受話器をかけた。残った硬貨が三枚戻って来た。二千四百円の電話代だった。

航空券の領収書か、と、河北は小さく笑った。いかにもあいつの考えそうなことだと思ったが、大統領選を戦っているアメリカの上院議員にとっては、領収書はどんな場合にでも要るものなのかもしれない。

牧田はおれに会って、なにをいいたいのだろうか。

金、だろうか。金を渡して、おれを黙らすつもりなのか。とすればおれの狙いはあなたがち見当はずれではなかったということになる。

河北はマリオンの前を通り過ぎ、有楽町の方へ向かっていた。先ほど榊原が、銀座か、と、いかにも懐かし気にいった口調が思い出された。大学時代から、二人はよく銀座で飲んだ。初めころは榊原が払うことが多かったが、後には奢るのはいつも河北だった。そのうち榊原は広島へ転勤になり、結婚し、離婚して、短い東京での勤務のあと、ワシントンへ赴任している。

もうすこし念入りに話すべきだった、と、河北は思っている。公衆電話からでは、やはり話が軽くなったと、河北はずしりと重いズボンのポケットの百円玉を握んだ。

有楽町で山手線に乗り、東京駅で降りた。乗り換えるためだったが、少し飲みたい気分でもある。河北は改札口を出て、精養軒の前の階段を二階へ上った。ステーションホテルのバーは、銀座の街と同じように、今夜は閑散としていた。

隅のスツールに坐って、麒麟のラガーをたのんだ。常連の客たちはいなかった。それが河北の心を和ませた。

「奢らせてもらえますか」

顔馴染みのバーテンダーにいった。河北がそんなことをいうのは滅多にないことだった。

「は」

という顔をする男に、

「百円玉が余って、どうしようもない」

カウンターの上面に硬貨を並べて、一枚一枚積み始めた。三十七枚もある。もっとゆっくり、榊原と話せたのだった。

「どうしました、こんなに」

「電話をかけるために、くずしたんだが、ケチっちゃってね」

自嘲気味にいった。

「国際電話ですか」

もともと察しのいい男だった。

「ああ、急に電話ボックスからね」

「それが、余った」

「そういうこと」

「では、同じものを」

バーテンダーは後ろのガラスのケースから小壘を出して、自分のグラスに注いだ。

「いただきます」

「どうぞ」

「いいお話だったのでしょうか」

そういわれると、これは河北自身にもわからないことだった。だが、いまアメリカの大統領候補選に出ている男が、自分に会いたい、といっているのだ。しかも、それをアレンジしたのは、高校のころからの、いつてみれば親友、だった。

「ああ、いい話だった、と思う」

河北は、そう答えた。そう口に出してみると、たしかにいい話にちがいないと思えてくる。

金では、なかった。もちろん、河北にとつて、金も大きな要素ではある。しかし、それだけではない。

「おれは、イヤな奴だろうか」

河北は、向こうを向いているバーテンダーに、いった。

「なにか、いわれましたか」

「おれは、イヤな奴かな」

「ご冗談を」

バーテンダーはそれに取り合わず、新しくふらりと入って来た、一見らしい女性客の方へ近づいて行った。

百円玉で払って、バーを出た。すぐ中央線に乗った。家に帰るつもりだったが、次の神田で止まったとき、発車間際に飛び降りていた。会社へ寄つてみることにしたのである。

河北の勤めている出版社は三崎町の雑居ビルの二階にある。一階の通用門は閉まっていたが河北は鍵を出して開け、狭い階段を上った。

二階は廊下も部屋も明るかった。まだ誰か残っているらしい。河北はすこし乱暴にドアを開けた。その気配に、編集部の隅のデスクにいた女が、はっと、顔を上げた。

「なんだ、河北さんか」

池上杏子は、そんないい方をした。

「おれで悪かったな」

河北は自分のロッカーの数字を合わせながらいった。そして、まだ記事にしている取材のファイルの中から、マキタに関する分を抜き出した。その中には先日、ワシントンの榊原に送った手紙のコピーを含め、ここ数年に亘って自分の足で集めたいわば生のデータと、マキタについての各紙や雑誌等のスクラップが、厚いファイルに満ちている。

マキタに関しての情報は、もちろんこの二月、彼が大統領選に加わってから、飛躍的に増えていたが、河北は、それよりかなり以前から、あの男を追っていたのだ。

「杏子ちゃん、なにか、袋ないかな」

河北は自分のロッカーを閉め、ダイヤルの数字を乱して、そういった。

「袋？ あるわ」

杏子はデスクの足許を腰をかがめてまさぐり、手提げ紐の付いたショッピングバッグを取り出した。高島屋の赤いバラがかすかに汚れている。

「これにちょうど入る、はず」

河北の持つているのがファイルと知っていた。

「家で、仕事をなさるの」

感心した、というポーズで杏子はいつて、ファイルをバッグに入れてくれた。

編集部と営業部が雑然と同居している大部屋には、他に人影もない。

「君、一人？」

「ええ。さっきまでは、武知君や水谷さんがいたんだけど、引き揚げちゃった。近くで飲んでるん

でしょうけど」

「あつちほ？」

河北は顎で、役員たちのいるブースの方を示した。

「とつくに帰ったわ」

「君は何をしてんだ」

自分のデスクに戻りかける杏子の後ろから訊いた。彼女の後れ毛のあたりが、今夜はいやに艶めいて見える。

「原稿の書き直し。明日から休みを取るでしょ。ちよつと気になったから、やっているの」

河北はデスクの引き出しからジンを出してキャップを取ると、そのまま一口飲んだ。

杏子は長い髪をデスクに垂らして、鉛筆を走らせている。二十代半ばの女で、ふだんは気にもしていない同僚の編集部員なのだが、いま、ひどく好ましいものに感じた。こんな会社で、こんな雑誌をつくっているのに、これほど真剣に働いている。池上杏子は入社して三年になるが、おそらくこの会社の運営の仕組みはわかっていないだろう。そしてもちろん河北のしていることも。

河北は紙のバッグに入れたファイルをもう一度取り出して、パラパラと繰った。なぜ、このファイルを自宅に持ち帰ろう、としたのかを考えた。とにかく、神田で電車が止まっている間にそんなことを瞬間に思いつき、そのために会社に戻って来た。河北は、今度のアメリカ行、つまりマキタ上院議員に会うことに、やはりかなり緊張している。潜在意識のなかに、ある種の危険を感じているから、それでこのファイルを、会社のロッカーに残しておきたくなかったのだ。

河北はもう一口、ジンを飲んだ。松やニめいた匂いが口腔に満ち、軽い酔いが確実に生じている。

「杏子ちゃん」

「なんですか」